

## 明代南蔵本『古尊宿語録』について

野 沢 佳 美

はじめに

『古尊宿語録』は、唐末から北宋期にかけての禅僧の語録集であり、三十六家四十八巻からなっている。我が国では縮刷蔵や続蔵などに入蔵されており、容易に利用することができる。しかしこんにち我々が利用できる『古尊宿語録』は、明初において新たに編纂されたものであって、宋代に刊行されていた数種の『古尊宿語要』とは、だいぶ構成・内容を異にしたものである。

その明版『古尊宿語録』と宋版の『古尊宿語要』の比較検討は、江戸中期の禅僧無著道忠によって始められた。道忠は享保十六（一七三二）年に両者の校勘記である『鼓山元撰古尊宿録校訛』四巻を著わしている。<sup>(1)</sup>さらに近代になって、宇井伯寿氏が同書の変遷過程を考察されているが、明版に対して誤解があるようである。<sup>(2)</sup>その後柳田聖山氏が日本現存の宋版『古尊宿語要』の調査研究を行ない、宋・明両版の総合的な比較検討を発表され、その結果、明版『古尊宿語録』は、宋の咸淳三（一二六七）年に、杭州の覚心居士が重刊した『古尊宿語要』に基づき、明初に至って新たに数家を加増して再編されたものであり、それが当時開板されていた勅版大蔵経である南蔵に入蔵され、その後そ

の南蔵所収本が明末の嘉興蔵に継承されており、清の龍蔵や我が国の縮刷蔵などはその嘉興蔵所収本を底本として  
ることなどを明らかにされた。<sup>(3)</sup> さらに椎名宏雄氏は、柳田氏が調査されなかつた宋版の調査結果をも踏まえ、宋代よ  
り現代に至る同書の諸本系統の詳細な考証をされているが、明版については柳田説を継承されている。<sup>(4)</sup>

以上が現在までの『古尊宿語録』の研究状況であるが、とくに明版『古尊宿語録』について見ると、明初において  
宋版を基に新たに再編されたものが南蔵に入蔵され、そしてその南蔵所収本が明末の嘉興蔵に継承され、その嘉興蔵  
本がその後の中・日の各大蔵経の底本となっていると理解されている。つまり現在広く行なわれている四十八巻本  
『古尊宿語録』は、南蔵所収本と同一であると考えられている。

ところで前記の諸氏が宋版との比較検討に使用された明版は、嘉興蔵本及びそれを底本とした縮刷蔵であつた。そ  
れは従来、我が国においては南蔵の遺存が極めて稀であり、またその遺存するものが多いとされる中国においても調  
査・紹介が行なわれていないため、南蔵所収本を利用することが不可能であつたからである。ところが山口県快友  
寺には南蔵数千巻が現存し、その中の一部が戦前より数度に亘つて一般に公開されており、その時巻末に識語をもつ  
『古尊宿語録』巻第二十一が<sup>(5)</sup>出展された。後述するように柳田氏は、その識語をもとに明初における同書の変遷過程  
を明らかにしたのであるが、その全体の調査研究にまでは及ばれなかつた。

ところで近年、立正大学図書館にも比較的まとまつた状態で南蔵が現存していることが判明したが、<sup>(6)</sup>その中に『古  
尊宿語録』四十八巻中、十九巻が現存している。しかし同大図書館所蔵本は本来の四割しか現存していないことから、  
その内容をうかがうには困難な状況にあつた。そうした折再び快友寺の南蔵を調査する機会に恵まれた筆者は、その  
中に現存する『古尊宿語録』を調査し、<sup>(7)</sup>その結果、立正大学図書館本をはるかに上回る数量を確認することができた。  
重複箇所を除き、両所の所蔵本を併せると、数巻に缺損部分が見られるものの、全四十八巻中、巻第三十一、第四十、  
第四十六の三巻を缺くのみとなり、おおよそ本来の姿をうかがうことができることとなつた。

南藏本と嘉興藏本を比較したところ、意外にも両者間にはすこぶる構成・内容に相違が見られ、しかも前者には、後者はもちろんのこと、従来でも全く知られていない南宋から元、明初に至る時期に活動した楊岐派・大慧派の禅僧の語録が収録されているなどの事実が明らかとなったのである。つまりこのことは、従来考えられているように、嘉興藏所収の『古尊宿語録』は、南藏所収のそれをそのまま継承したものではないことを意味しており、この南藏所収本は、同書の変遷過程を考える上で極めて貴重な存在といえる。

以上の重要性から今般、両所の南藏本『古尊宿語録』が影印刊行された<sup>8)</sup>。これらを基に多角的な研究がなされなければならぬが、ひとまず本稿では、南藏本の構成、嘉興藏本では削除されている巻第二十一の構成と内容、さらにはその編纂者である定巖浄戒などについて考察を加え、大方のご教示を仰ぐこととしたい。

なお本稿では、南藏所収の『古尊宿語録』を南藏本、嘉興藏所収のそれを嘉興藏本と略称することにした。

## 一、南藏本の構成

まず南藏本の構成について見てみることにするが、南藏自体の書誌的事項や各語録のおびただしい出入状況については、別稿<sup>9)</sup>及び前記両影印本の解説で述べてあるので、それについての言及は最小限にとどめ、以下では、嘉興藏本との比較をとおして南藏本の構成を見ていくことにする。

立正大学図書館及び山口県快友寺の南藏本は、その重複箇所を除き併せると、本来の四十八巻中、巻第三十二、第四十、第四十六の三巻を缺くのみで、本来の姿に近い状態となる。しかし中には一巻中数張のみ、あるいは一張の半分ほどがcaろうじて現存しているといった巻もある。南藏本は、密・勿・多・土の函号に、それぞれ十二巻ずつに分かたれている。ただし密函のみは「密二」に巻第一、第二の二巻を合巻しているが、これは「密一」に『六祖大師法

立正大学図書館・山口県快友寺蔵 南 蔵 本		嘉 興 蔵 本	
函号函次	巻 次	語 録 名	語 録 名
密二	巻第一之一	(南岳、馬祖、百丈)	南岳禪師、馬祖禪師、百丈禪師
〃三	巻第三	百丈禪師語之餘、黄檗禪師	百丈禪師語之余、筠州黄檗断際禪師
〃四	巻第四	(黄檗禪師)	黄檗断際禪師宛陵録
〃五	巻第五	(臨濟禪師語録)	鎮州臨濟惠照禪師語録
〃六	巻第六	臨濟慧照禪師餘録、興化禪師	臨濟禪師語録之余、興化禪師語録
〃七	巻第七	(睦州和尚語録)	睦州和尚語録
〃八	巻第八	(汝州南院禪師)、風穴禪師	汝州南院禪師語要、風穴禪師語録
〃九	巻第九	首山禪師	汝州首山念和尚語録
〃十	巻第十	石門山慈照禪師	石門山慈照禪師鳳巖集
〃十一	巻第十一	(汾陽昭禪師)、[承天智高禪師]	汾陽昭禪師語、并州承天高禪師語録
〃十二	巻第十二	(慈明禪師)	慈明禪師語録
勿一	巻第十三	南泉禪師、子湖山第一代神力禪師語録	池州南泉普願禪師語要、衢州子湖山禪師語録

『宝檀經』<sup>10)</sup>一巻が収められているからである。したがって南蔵本は全四十八巻、四十七帖からなっている。版式は一帳三十行、一折六行十七字詰(一部に十八字詰箇所もあり)。一巻の張数は、最終張が現存して確認できる範囲内で、最も多いものは巻第十六などの二十四張であり、少ないものでは巻第六の十張である。

さて南蔵本及び嘉興蔵本の構成を一覧表にしたものが次表である。この表を一瞥してまず気づくのは、構成面から見れば、嘉興蔵本は南蔵本をほぼそのまま継承していることがわかる。しかしながら、南蔵本の巻第一・第二、巻第二十一、巻第三十七、巻第四十七に、嘉興蔵本と若干のズレが生じていることが注意される場所である。これが南蔵本の特徴といえる重要な点であるので、以下そのことについて見ていこう。



<p>“ 二 卷第三十八 鼓山興聖国師</p> <p>“ 三 卷第三十九 洞山第二代初禪師</p> <p>〔缺〕 [智門祚禪師語録]</p> <p>“ 五 卷第四十一 雲峯禪師語</p> <p>“ 六 卷第四十二 雲峯禪師語</p> <p>“ 七 卷第四十三 雲庵真禪師</p> <p>“ 八 卷第四十四 (雲庵真禪師)</p> <p>“ 九 卷第四十五 真淨禪師語</p> <p>〔缺〕 [真淨禪師]</p> <p>“ 十一 卷第四十七 瑯琊廣照禪師、[雲門庵主頌古]</p> <p>“ 十二 卷第四十八 (仏照禪師奏対録)</p>	<p>卷三十六 投子和尚語録</p> <p>卷三十七 鼓山先興聖国師和尚廣集</p> <p>卷三十八 襄州洞山第二代初禪師語録</p> <p>卷三十九 智門祚禪師語録</p> <p>卷四十 雲峰悦禪師初住翠巖語録</p> <p>卷四十一 “</p> <p>卷四十二 宝峰雲庵真淨禪師語録一</p> <p>卷四十三 “ 二</p> <p>卷四十四 “ 三</p> <p>卷四十五 宝峰雲庵真淨禪師偈</p> <p>卷四十六 滁州瑯琊山覚和尚語録</p> <p>卷四十七 東林和尚雲門庵主頌古</p> <p>卷四十八 仏照禪師奏対録</p>
<p>注①、語録名は各巻首に記載されたものを採用した。</p> <p>注②、巻首・末が脱落して、語録名が確認できないものは、( ) を付し、嘉興藏本のそれを参考にして便宜的につけた。</p> <p>注③、脱落によってその語録の存在すら確認されないものは、智旭撰『閱藏知津』卷四十二などの記載によって補い、語録名に「」を付した。</p>	<p>注①、嘉興藏本は、台湾新文豊出版公司印行の『明版嘉興大藏經』(一九八七)第十冊所収本を使用した。</p> <p>注②、巻首・末に付せられた序、祭文、行状等は省略した。</p>

まず南藏本は巻第一と第二とを合巻としている。ただこの巻は快友寺本中にわずか第十六、十九の二張のみしか現存していないが、明らかに百丈禪師の語録の一部で、嘉興藏本巻一の当該箇所と照合すると字句の異同はない。おそらくそれ以前には、嘉興藏本と同様に南岳、馬祖の両禪師の語録が収録されているものと思われる。南藏本の巻第一

と第二が合巻であることは、「密三」の函号函次をもつ次巻が巻第三であることや、後に述べる呂激氏が調査された「洪武南蔵」の報告書に掲載された『古尊宿語録』の巻首の書影からも明らかである。つまり先に述べたように、南蔵は『古尊宿語録』の前に『六祖大師法宝壇経』一卷を収めていたが、一函号につき十二巻を分巻せねばならない必要から、巻第一、第二を合巻とする措置を採ったものであろう。しかし嘉興蔵本はこれを「巻一」としたため次巻以降、南蔵本との間に一巻の巻数のズレが生ずることになる。

次に嘉興蔵本との間で最も相違する点は、巻第二十一の存在である。同巻には白雲守端から覺源慧曇に至る楊岐派・大慧派の禅僧の語録が一括されており、極めて注目される巻であり、詳細については次節で述べる。嘉興蔵本は、この南蔵本巻第二十一所収の語録を全く削除しているため、それ以降南蔵本との間に二巻のズレが生じている。

以上のように、南蔵本の巻第一・第二の合巻を嘉興蔵本ではその巻一とし、さらに南蔵本の巻第二十一を嘉興蔵本は全く削除していることから、前半部において両者は二巻のズレを見せている。ところが南蔵本の巻第三十七に一括収録されている大随神照禅師及び投子大同禅師の語録を、嘉興蔵本は巻三十五、三十六にそれぞれ分巻していることから、ここでその差が一卷となる。しかし南蔵本・嘉興蔵本とも最終巻である巻四十八には「仏照禅師奏対録」が収録されている。それなら南蔵本巻第三十七以降、巻第四十八に至る間で残りの一巻のズレを、嘉興蔵本はどのように調卷しているのだろうか。

先述のとおり立正大学図書館及び快友寺の南蔵本では、全四十八巻のうち、巻第三十二、第四十、第四十六の三巻が散佚しているが、巻第三十二は龍門佛眼禅師語録の第四であることは明らかであり、また巻第四十はおそらく嘉興蔵本の巻三十九の智門光祚禅師の語録に相当し、巻第四十六は嘉興蔵本の巻四十五に相当する真浄禅師の偈頌が収録されているものと思われる。このように見えてくると、両所の南蔵本の散佚している巻は、それぞれ嘉興蔵本に該当する箇所があるから、南蔵本巻第三十七以降で、南蔵本の一巻を嘉興蔵本が二巻に分巻している可能性があるのは、巻第

四十七ということになる。

快友寺南藏本巻第四十七は、第一張から二十二張（ただし第十三、十六張が脱落）までが現存しているが、当該箇所は瑯琊広照禪師の語録で、嘉興藏本の巻四十六に相当する。ところが嘉興藏本では次の巻四十七に「東林和尚雲門庵主頌古」を一括しているが、それに相当する箇所が南藏本には見当たらない。南藏本巻第四十七は第二十二張までしか現存していないが、それ以降には瑯琊広照禪師の語録だけでなく、「東林和尚雲門庵主頌古」の一部分が収録されていたのではないだろうか。つまり嘉興藏本では、南藏本巻第四十七をその巻四十六、四十七とに分巻する措置を採り、ここで両者間のズレを修整していたと考えられるのである。

ところで南藏本の構成について、すでに明末清初の僧藕益智旭がそれをいちいち記している。智旭は南藏・北藏の經典を基に新たな編成のもと、後人の閲藏の便に供すべく、各經典の編著者及びその概要をまとめた『閲藏知津』四十四卷（目録四卷）を著わしているが、その巻四十二・雜藏・此方撰述・四禅宗の項で『古尊宿語録』の構成を列記している。『古尊宿語録』は北藏には入藏されていないから、その構成は明らかに南藏のものである。それによれば、前掲の南藏本の構成表と全く一致するが、瑯琊広照禪師の語録と「仏照禪師奏對録」との間に「雲門庵主頌古」と明記されているから、やはり先に類推したごとく、南藏本巻第四十七には瑯琊広照禪師の語録と共に嘉興藏本の「東林和尚雲庵主頌古」に相当する「頌古」が収録されているのである。なお立正大学図書館及び快友寺所蔵本で散佚している巻第十一の後半には、承天智高禪師の語録が存在していることも知られる。

いまひとつ注意したいのは、嘉興藏本巻七の巻末に付せられている物初大観が記した「重刻古尊宿語録序」である。この序は、冒頭に述べた如く、明版『古尊宿語録』が底本としたとされる覚心居士が重刊した『古尊宿語要』に、物初大観が寄せたものである。残念ながら快友寺の南藏本巻第七は巻末が脱落しているため、南藏本にもその序文が存在するのかわからない。ただ南藏本の構成を記した前掲の智旭『閲藏知津』に、

## 中有阿育王山住持大觀序

とあるから、確かに同書中に「序」が存在していることが知られるが、それが嘉興藏本と同様にその巻第七にあるかは判然としない。ところで柳田聖山氏は、嘉興藏本の物初大観の序文の末尾には、覺心居士重刊本『古尊宿語要』の序に見られぬ「唐宋諸碩師……実有補於宗門」の一文があるが、これはのちに述べる南藏本の編纂者である浄戒が執筆して付加したものでないかと推測されている<sup>11)</sup>。智旭は物初大観の序文の存在しか注記していないので、はたしてその浄戒が執筆したという一文が存在するかどうかは、今のところ明らかにしえない。

以上が嘉興藏本との比較をとおして見た南藏本の構成である。構成面に限ってみれば、嘉興藏本は基本的に南藏本の構成を継承していることが知られる。しかしながら南藏本の構成で最も注目すべきことは、なんとといっても巻第二十一の存在である。というのも、そこに収録された禅僧の語録は、嘉興藏本では全く削除されているからである。つまりこの巻第二十一の存在そのものが、南藏本の性格を如実に示しているといえよう。そこで節を改め、嘉興藏本が削除した南藏本の巻第二十一について見てみることにしたい。

## 二、巻第二十一の構成と内容

南藏本の巻第二十一は全三十二張からなり、その巻末には浄戒の識語が付されている。この識語をいちはやく斯界に紹介されたのは、おそらく龍池清氏であろう<sup>12)</sup>。氏は福州鼓山湧泉寺及び怡山西禅寺の明清版大藏経を調査され、その報告書の中に浄戒の識語を転載されている。その識語に関するコメントはとくにないが、ただ注目すべきことは、氏はその識語が付されている巻次を「巻第十七」としていることである。快友寺南藏本中には巻第十七が現存するが、残念ながら第十九張以降が現存しないので、同巻にも浄戒の識語が付されていたのかはわからない。もっとも龍池氏

も卷二十一については触れられていないから、あるいは識語が付されている巻が定まっていなかったのかもしれないが、識語の性格からすれば、卷第二十一の巻末にあるほうがより相応しいように思われる。

その後本格的にこの識語を取り上げられたのが柳田聖山氏である。氏は、昭和十年に開催された「東京大藏会」の展覧目録から、その時出展された快友寺南藏本卷第二十一の識語を取り上げられ、『古尊宿語録』を始めとする多くの禅籍が、永楽二（一四〇四）年に刊補された後、同十一（一四一三）年の春から冬にかけて南藏の一部として刊修改補されたものであったことなど、明初における同書の変遷過程を明らかにされたのである。<sup>13</sup>

以上のように、南藏本卷第二十一の巻末に付された浄戒の識語は、すでに先学によってその存在が明らかにされている。しかしその浄戒の識語以上に重要なのは、その巻に収録されている内容である。ところが、こんにちに至るまで詳細に卷第二十一の構成・内容を明らかにしたものはないようで、わずかに先の智旭が『閱藏知津』卷四十二で『古尊宿語録』の構成を列記している中に、

…白雲端、佛照光、北磻簡、物初観、晦機熙、笑隠訢、仲方倫、覺源曇、有宋濂藏衣塔銘：

と、卷第二十一に相当すると思われる構成を記しているのみである。しかしながら当該箇所より詳細な状況については、もちろん智旭はなにも触れておらず、しかも先の浄戒の識語の存在すら記していない。ところが幸いなことに立正大学図書館・快友寺の両所に卷第二十一が完全な形で現存しており、いまままで明らかにされなかったその構成と内容を確認することができたので、以下でその点について見ていくことにしよう。

さて卷第二十一の巻首には、

白雲端禪師 南嶽下十二世嗣楊岐

佛照光禪師 南嶽下十六世嗣大慧

北磻簡禪師 嗣佛照派下五人附録

とあり、本巻には白雲守端、佛照徳光、北磻居簡の三禅師の語録と、北磻禅師派下の五禅師の語録を収録していることを記している。

まず冒頭には、白雲守端禅師の語録を収録する。楊岐方会の法統を嗣いだ白雲守端（二〇二五〜二〇二七）の語録には、天柱処凝編『白雲守端禅師広録』四卷（統蔵二二二五〜二二二七）があるが、巻第二十一所収の語録と一致せず、その大半が『嘉興藏統蔵』に収められている『白雲守端禅師語録』二卷（No. 三五）と一致しており、また一部分ではあるが『統刊古尊宿語要』（統蔵二二二三〜二二三五）日集の「白雲端和尚語」と一致している。白雲守端の語録が終わると、

東山五祖演禅師語三卷在土字函中

圓悟佛果禅師語一十七卷具列別函

大慧普覚祖師語三十卷在説感武三函茲不録

とあり、五祖法演、圓悟佛果、大慧普覚の三禅師の語録は他所に収録されているので、ここでは省いたと注記する。五祖法演の語録三卷は、同南藏本中の巻第二十二〜二十五に収録されており（函号を土とするのは勿の誤り）、圓悟佛果の語録十七卷は、大慧普覚の語録三十卷とともに、独立してそれぞれ南蔵に入蔵されている。白雲守端から佛照徳光に至る間に、上記三禅師が相次いで法統を嗣いでいるが、すでに彼らの語録は他所に収録されているので、ここに注記を挿入したのであろう。

その注記のあとには、佛照徳光の語録が収録されている。大慧宗杲の法嗣である佛照徳光（一一二一〜一一二〇三）の語録は、『統刊古尊宿語要』（統蔵二二二四〜二二二六）星集に「佛照光和尚語」があり、一部南藏本と一致する法語がある。続いて佛照徳光の法嗣北磻居簡の語録を収録している。北磻居簡（一一六四〜一二四六）の語録は、その法嗣物初大観が編纂した『北磻居簡禅師語録』（統蔵二二二六〜二二二八）がある。同語録と南藏本の語録とを比較するに、後者はその冒頭の七行を除くすべてが前者中に確認される。

さて北磻禪師の語録のあとには、

物初觀禪師 南岳十八世嗣北磻禪師

晦機熙禪師 南岳十九世嗣物初禪師

広智全悟笑隱訶禪師 二十世嗣晦機

仲方倫禪師 南岳二十世嗣晦機禪師

覺源曇禪師 南岳廿一世嗣広智和尚

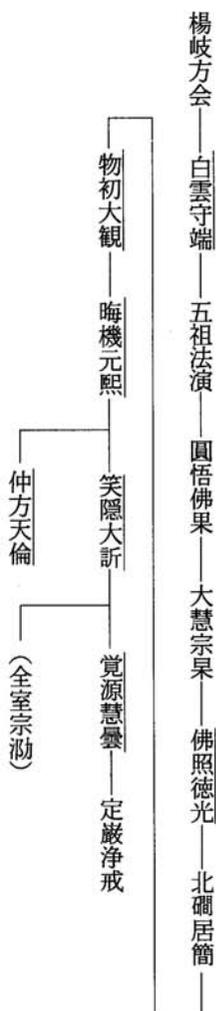
右附録五人

とあり、以下に北磻禪師派下の五禪師の語録が続くことが記されている。まず北磻禪師の語録の編者でもあり、その法を嗣いだ物初大観（二二〇一〜六八）の語録には、その門人徳溥らが編校した『物初和尚語録』（統蔵一―二二六―一）があるが、南藏本との間に一致する語は見当たらないようである。次の物初大観の法嗣晦機元熙（二二三八〜一三一九）の語録は、いまのところその存在は知られてはおらず、したがってここに収録された語録は未知のものである。なおこの元熙の語録の冒頭には七行ほどの彼の小伝があるが、それを虞集撰「晦機禪師塔銘」（『道園學古録』巻四十九）と比較するに、前者は後者を節略したものであることが明らかである。続く晦機元熙の法嗣笑隱大訶（二二八四〜一三四四）の語録には、門人廷俊、慧曇らが編した『笑隱訶禪師語録』四卷（嘉興藏統蔵No.六二五）があるが、南藏本と比較するに、後者の冒頭の小伝以外はすべて前者中に確認される。なお冒頭の小伝は、おそらく虞集撰「笑隱訶公行道記」および黄潛撰「訶公塔銘」（いずれも『笑隱訶禪師語録』末に収録）からの節略であろう。同じく晦機元熙の法嗣である仲方天倫の語録、及び最後の笑隱大訶の法嗣覺源慧曇（一三〇四〜七一）の語録も、やはりいまのところ知られてはおらず、この南藏本の語録は晦機元熙同様未知のものである。なお覺源慧曇の語録の後半には、明初の儒者宋濂が撰した「天界覺源曇公大禪師藏衣塔銘」が収録されているが、これは撰者である宋濂の『宋学士文

集』(明正徳刊、四部叢刊本) 卷第二十五にも採録されているが、両者間に字句の相違がかなり見られる。

以上、南蔵本の卷第二十一の構成と収録内容を見てきた。ここに収録された禅僧の語録を現存する語録と比較するに、ほとんど一致するものがある反面、従来では全くその存在すら知られていない語録、すなわち晦機元熙、仲方天倫、覚源慧曇などの語録が存在している。これらはいずれも斯界未知のものであって、その意味するところはさぶる大きいものがある。

ところで、最も注目すべき点は、卷第二十一に収録されている禅僧の関係である。すでに明らかなように、ここに収録されているのは、楊岐方会より覚源慧曇に至る楊岐派・大慧派の直系の禅僧たちである。いまその法系を示せば次のとおりである。



傍線を付した者が卷第二十一に語録が収録されている禅僧である。なお、楊岐方会の語録は南蔵本の卷第二十に、五祖法演は同じく南蔵本卷第二十二〜二十四にあり、さらに圓悟佛果、大慧普覚の両者の語録は独立して南蔵中に入蔵されている。このようにして見てくると、この卷第二十一は、楊岐方会より覚源慧曇に至る禅僧で、『古尊宿語録』を含めた南蔵中に、すでにその語録が存在する者以外の語録を本巻に収録していることがわかるが、他所に語録が存

在する禅僧もいちいちその所在を明記していることを考え併せれば、基本的には楊岐方会より覚源慧曇に至る者を一括することに、本巻の目的があったといえよう。

それではなぜ、巻第二十一にはそのような禅僧たちの語録が収録されているのであろうか。すでに述べたように、南蔵本の編纂者は定巖浄戒なる禅僧である。浄戒については次節で考察するが、彼は覚源慧曇の法を嗣ぎ、その法叔全室宗泐とともに南蔵の編纂に重要な役割を演じた人物である<sup>(15)</sup>。してみると浄戒は、自らが編纂に携わった南蔵の『古尊宿語録』中の一卷に、楊岐方会より自己の師覚源慧曇に至る禅僧の語録を一括収録していたわけである。浄戒がとくに選んで巻第二十一に白雲守端以下の禅僧の語録を挿入したのは、巻第二十には派祖であり白雲守端の師に当たる楊岐方会の語録が、また巻第二十二～二十四には白雲守端の法嗣五祖法演の語録が収録されているからであろう。このようにして見てくると、浄戒は自らが編纂した『古尊宿語録』中に、自身の師覚源慧曇に至るまでの楊岐派・大慧派の禅僧の語録を一括することによって、禅宗界における自派の位置づけを明確にせんとしたものでなかつたろうか。その意味でこの巻第二十一は、至極意図的な編纂物であったということができよう。

以上のように、南蔵本巻第二十一は、同書の編纂者であった浄戒の意図的な編纂方針によって一卷にまとめられて南蔵本中に加増されたものであったが、いったい浄戒なる人物はいかなる僧であったのだろうか。またどのような経緯を経て浄戒の『古尊宿語録』が南蔵中に入蔵されたのであろうか。この点を次節で考えてみたい。

### 三、浄戒と『古尊宿語録』の入蔵

南蔵本の巻首には、

僧録司右闡教兼鍾山靈谷禅寺住持浄戒重校

とあって、本書が浄戒によって重校されたことがわかるが、彼は『古尊宿語録』のみならず、実に南藏中の『禪宗頌古聯珠通集』『六祖大師法宝壇經』『明覚禪師語録』『圓悟佛果禪師語録』などの禪籍を重校している<sup>(16)</sup>。これらはいずれも初入藏の經典であるが、このことから南藏における浄戒の影響の程がうかがえる。

そのような浄戒であるにもかかわらず、不思議なことに、彼の動向を知る手立てとなる伝記史料類はそれほど伝存していない。しかしながら、断片的ではあるが、彼の動向をうかがい知る地方志や寺志の伝記が存するので、これに呂澂氏の「洪武南藏」の報告書中に見える浄戒に関する事実などを加え、明初における彼の動向及び『古尊宿語録』との関係について考察を加えてみたい。

さて同治『湖州府志』卷九十一・方外釈・明の項には、成化『湖州府志』及び王道隆撰『菰城文獻』より引用した、浄戒、姓王、字定巖、号幻居。烏程南潯人。出家於種福院。後游諸方、参礼名师天竺・虎跑・靈谷諸寺、皆有遺跡。官至左覺義・左講經、受勅為慧濟禪師、無疾而寂。…弟子宗・彝奉其不燼齒牙数珠、葬于道場山之太師塋。有語録行於世。

との浄戒の略伝を載せており、また初期の浄戒については、道光『靈谷禪林志』（光緒十三年重刊本）卷八・高僧二・明浄戒の項に、

浄戒、字定巖、号幻居。吳興人。髻齡喜儒佛兼誦。年十一、即求出家、至金陵。時值覺源曇公住天界、…（浄戒）言下大悟、復游東南名流加敬。…

とあって、やや詳しく伝えている<sup>(17)</sup>。これらを総合すれば、浄戒は湖州府烏程縣南潯鎮（浙江省吳興縣東）に生まれ、俗姓を王氏といい、字を定巖、幻居と号し、早くから儒・仏に通じていたようで、十一歳の時、郷里の種福院にて出家し金陵（南京）に至ったという。その時天界寺の住持となっていたのが覺源曇曇であり、彼の下に参じて言下に大悟したという。前掲の宋濂が撰した「天界覺源曇曇公大禪師藏衣塔銘」によると慧曇は、洪武元（一三六八）年春、天

界寺に善世院が設けられるや、洪武帝の命によって釈教の事を領するため、太平興國禪寺より移って天界寺の住持となり、その後同三（一三七〇）年六月には勅命によって西域に使いし、同四（一三七二）年に同地で没しているから、淨戒が慧曇の下に参じたのは洪武元年から同三年の間のことになる。その後淨戒は一旦南京を離れ、天竺寺や虎跑寺、靈隱寺<sup>19</sup>など杭州の名刹に游学することになるが、その折、宋濂より「贈定巖上人入東序」<sup>20</sup>を送られている。その後淨戒は、洪武二十二（一三八九）年から同二十五（一三九二）年にかけて中天竺寺で『禪宗頌古聯珠通集』を重刻している（重刻序、統藏二二一）から、おもに中天竺寺で活動していたようである。

さてその淨戒が朝廷の命によって、居頂らとともに僧録司の官となり、左覺義（従八品）に除せられて南京の雞籠山雞鳴寺住持となるのは、洪武二十七（一三九四）年正月のことである<sup>21</sup>。その後、左講經（正八品）へと進んでいる。永楽年間以降の動向については、前掲の道光『靈谷禪林志』の続文に、

永楽初、勅住靈谷、升右闡教。戊戌六月二日亭午、起座索紙筆、書偈而逝。：

とあり、永楽の初めに勅命によって右闡教（従六品）に除せられ、鍾山靈谷寺住持に就任している。そして戊戌すなわち同十六（一四一八）年六月二日に没し、前掲の同治『湖州府志』に見えるように、郷里烏程県の南西にある道場山太師塢に埋葬されている。『靈谷禪林志』巻九には、淨戒に対する永楽帝及び皇太子高熾の祭文と、淨戒に「慧濟禪師」の号を追諡する宣宗宣德帝の勅が掲載されているが、皇族との関係の程がうかがわれる。なお先の同治『湖州府志』によれば、淨戒には語録があって世に行なわれたというが、いまのところその所在はわからない。

以上淨戒の略歴を一瞥してきたが、次に彼が『古尊宿語録』を重校し、それが南蔵に入蔵される経緯についてみていこう。

明初における南蔵の開板の経緯や印造状況などについては、いまだに解明されていない問題が山積している。張新鷹氏によれば、南蔵は洪武五（一三七二）年ごろからその編纂が開始され、永楽元（一四〇三）年に完成されたが、

その板木が蔵された天禧寺（のちの報恩寺）が同六（一四〇八）年に災禍に遭い、その際板木もことごとく灰燼に帰し、同十（一四一二）年から再刻作業が開始され、同十七（一四一九）年には完了し、これが現存知られている南蔵であるといふ。<sup>(22)</sup> 張氏は、前者の南蔵を「洪武南蔵」、後者を「永楽南蔵」と仮称され、現在南蔵といえはほとんどの場合後者を指すという。明初の南蔵に「洪武南蔵」と「永楽南蔵」の二種が存在したことは、張氏が断片的史料から得た推論ではなく、現在知られている南蔵と異なる編成をもつ南蔵が、民国二十七年（一九三八）年に四川省崇慶県光嚴禪院で発見されたが、張氏はその調査報告である呂澂氏の「南蔵初刻考」に依拠しているのである。<sup>(23)</sup> つまり洪武時代に編纂された南蔵は、永楽初期の災禍によって烏有に帰し、その後再び新たな編成のもとに南蔵が開板されたというのである。<sup>(25)</sup> したがって本稿で取り上げている立正大学図書館や快友寺の南蔵は「永楽南蔵」なのである。

「洪武南蔵」の調査報告書である呂澂氏の「南蔵初刻考」<sup>(26)</sup> を、このほどようやく入手しえたが、それによれば、「洪武南蔵」は六百七十八函（天函く魚函）からなり、そのうち天函から煩函に至る五百九十一函は、一元の磧砂版の翻刻であったという。そして最も注目すべきことは、刑函から魚函に至る八十七函の経典である。これは、磧砂版の翻刻であった五百九十一函とは違い、「洪武南蔵」に新たに追加入蔵されたものである。すなわち刑函から魚函に至る八十七函の経典は、「洪武南蔵」のいわば「統蔵」に相当するものである。

このように「洪武南蔵」は、磧砂版を翻刻した「正蔵」部分と、その後追離された「統蔵」からなっていたことが、呂澂氏の報告書から明らかとなった。呂澂氏の報告書を基にした「洪武南蔵」の編成状況や「永楽南蔵」との関係などの考察は別の機会に譲りたいが、この「洪武南蔵」の「統蔵」が、本稿で取り上げている南蔵本の入蔵経緯を考える上で重要なポイントとなるようである。というのも、「統蔵」中に、『古尊宿語録』がすでに入蔵されているからである。

呂澂氏の報告書によれば、「統蔵」中の『古尊宿語録』は、誉・丹・青・九の四函号に収められており、<sup>(27)</sup> 同報告書

にはその「卷第一之二」の卷首一折の書影が掲載されている。それには、

古尊宿語録卷第一之二

卷二

僧録司左講經兼雞鳴禪寺住持臣僧淨戒奉勅重校

南嶽大慧禪師 大鑿下一世

馬祖大寂禪師 大鑿下二世嗣南嶽

百丈大智禪師 大鑿下三世嗣馬祖

とある。ここでまず注目されるのが淨戒の職名である。本節の冒頭に述べたように、立正大学図書館及び快友寺所蔵の南蔵本の卷首には「僧録司右闡教兼鍾山靈谷禪寺住持淨戒重校」と記されている。それが「洪武南蔵」の『古尊宿語録』には「僧録司左講經兼雞鳴禪寺住持臣僧淨戒奉勅重校」と見えている。したがってこのことから、淨戒は雞鳴寺住持時代に『古尊宿語録』を重校したのであり、しかもそれは「勅命」を受けてのことであったことがわかる。淨戒の略歴を先に一瞥したが、彼は「左覺義兼雞鳴禪寺住持」となるのは洪武二十七年のことである。その後左覺義から左講經へと昇進しているが、その年次は明らかにしない。その後靖難の役を経て即位した永樂帝の命により「僧録司右闡教兼鍾山靈谷禪寺住持」となるが、前掲の『靈谷禪林志』などではその時期を「永樂初」とするだけで、これもその年次を限定することはできない。ともかく淨戒が「勅命」を奉じて『古尊宿語録』を重校したのは、「左講經兼雞鳴禪寺住持」就任以降、永樂帝の命を受けて「右闡教兼靈谷禪寺住持」となる以前、すなわち洪武末から永樂初の間であることは確かかなようである。

ところで「洪武南蔵」の「統蔵」は、どのような経緯で編纂されたのであろうか。この点について居頂の『統伝燈録』（統蔵二乙一十五―二）の序の冒頭に、

洪武辛巳冬、朝廷刊大蔵経律論將畢、勅僧録司、凡宗乘諸書、其切要者、各依宗系編入。…

とある。洪武年間に「辛巳」の干支はないから、ここに見える「洪武辛巳」とは、柳田聖山氏が指摘されているように建文三（一四〇一）年に当たると考えてよいであろう。<sup>28</sup>つまり、建文三年の冬、洪武初期から開板作業が進められていた大蔵經（洪武南蔵）がいま将に完了されようとしているので、朝廷は僧録司に命じて、各宗派の重要典籍で未だ入蔵されていない經典を「洪武南蔵」に「編入」せしめたというのである。ここでいう新たに「編入」される經典が、「洪武南蔵」の「統蔵」にはほかならない。この勅命を受けて各宗派では、「編入」すべき經典の選定・編纂に着手したものと思われるが、禅宗系ではおそらく浄戒が中心となり、「古尊宿語録」を初めとして、呂澂氏の報告書によれば『六祖大師法宝壇經』『万善同帰集』『明覚禪師語録』『圓悟禪師語録』『宗門統要統集』『大慧普覚禪師語録』『禅宗頌古聯珠通集』『嘉泰普燈録』などの禅籍が「統蔵」に「編入」されている。このうち、そのほとんどが浄戒の重校本であることは、すでに述べたとおりである。

以上のごとく、靖難の役が大詰めを迎えようとしていた建文三年の冬に、朝廷の命によって禅宗を初めとする各宗派が、「洪武南蔵」の「統蔵」に「編入」すべき重要典籍の選定・編纂に着手したのであるが、とすれば、浄戒が『古尊宿語録』の重校に着手したのは、「統蔵」編纂の勅命が発せられた建文三年冬以降ということになる。なお、靖難の役に勝利を得た永楽帝の命によって、浄戒は右闡教に陞り、鍾山靈谷禅寺の住持に任命されるが、呂澂氏の報告書によれば、「統蔵」中の『圓悟禪師語録』の巻首には「僧録司右闡教兼鍾山靈谷禅寺住持臣浄戒奉勅重校」とあるというから、浄戒は靈谷寺住持就任以後も継続して「統蔵」に「編入」すべき經典を重校していたことがわかる。

以上のように、建文朝の「統蔵」追雕の命を機に、浄戒は禅宗系を代表して多くの經典を重校した。おそらくこのことが起因となって「洪武南蔵」の重要な編纂スタッフのひとりとして活躍したと思われる。さればこそ永楽帝は浄戒を「右闡教兼鍾山靈谷禅寺住持」に任じたものと考えられる。

さて「統蔵」を併せた「洪武南蔵」がいつごろ完成したかが問題となるが、前節で触れた南蔵本巻第二十一の浄戒

の識語には、

新藏経板、初賜天禧(寺)。凡禪宗古尊宿語・頌古・雪竇・明教・圓悟・大慧等語、多有損失。永樂二年、敬損衣資、命工刊補。今奉欽依取僧、就靈谷寺校正。以永樂十一年春二月為始、至冬十一月、乃畢。供需之費、皆本寺備給。計校出差訛字樣十五万余。刊修改補、今已幸完。…永樂十二年…淨戒謹識。

とある。この識語は立正大学図書館や快友寺に蔵されている南藏本、すなわち「永樂南藏」のものであるが、おそらく「洪武南藏」の『古尊宿語録』にも附加されていたと見てよいであろう。これによれば、淨戒の関与した禪宗系の經典のみではあるが、『古尊宿語録』を初めとする多くの禪籍は「統藏」に「編入」されるべく、永樂一(一四〇四)年より淨戒の住する靈谷寺で校正され、同十一(一四一三)年二月から十か月を費やして開板され、その際の経費は一切靈谷寺が負担したという。この識語は永樂十二(一四一四)年に執筆されているから、おそらくその前後に「統藏」部の開板は完了し、「洪武南藏」の編纂事業は終了したものと考えられる。呂澂氏が報告した四川省崇慶県光嚴禅院の「洪武南藏」は、永樂十四(一四一六)年、永樂帝の弟蜀獻王朱椿によって同寺に喜捨されたものである。

さらに注目すべきことは、淨戒の識語に「校出差訛字樣」、すなわち校正によって削除された字句が実に「十五万余」に達したと述べている点である。南藏本が嘉興藏本に比して極めて少ない法語しか収録していないことは、両影印本の解説でも述べた。おそらく大藏経という限られたスペースに多くの經典を収録せねばならない必要から、このように多数の字句が割愛されたものと考えられる。淨戒が重校した『古尊宿語録』もこの時大いに削減されたのかもしれない、あるいはその原本はいまの内容とはだいぶ異なっていたのかもしれない。

以上の経緯によって「洪武南藏」の「統藏」に入蔵された淨戒重校本『古尊宿語録』は、その後新たな編成の下に登場するいわゆる「永樂南藏」に継承され、その姿を南藏本としてこんにちに遺すことになるのである。しかし「洪武南藏」が、いつ、そしてどのような理由から「永樂南藏」へと再編成せねばならなかったのかは、いまのところ

ろまったくの謎というほかはない。

おわりに

本稿では、今回ほぼその全容が明らかとなった立正大学図書館及び山口県快友寺所蔵の南蔵本『古尊宿語録』について、嘉興蔵本との比較をとおしながら、その構成と内容、さらにそのもつ性格や編纂者浄戒との関係、南蔵への入蔵などの諸点について考察を加えてきた。その結果、おおよそ以下のことが明らかとなった。

靖難の役が大詰めを迎えようとしていた建文三年冬、「洪武南蔵」の「統蔵」追離の命が下されるや、浄戒は「統蔵」へ「編入」すべき『古尊宿語録』を初めとする多くの禅籍の選定・編纂に着手した。浄戒が『古尊宿語録』を重校するのは、彼が「永楽初」に靈谷寺住持に就任する以前であった。その浄戒重校本『古尊宿語録』はやがて「洪武南蔵」の「統蔵」に入蔵される。そしてその『古尊宿語録』は、いかなる理由によってかは判然としないが、その後新たななる編成のもとに登場する「永楽南蔵」へと継承される。その板木によって後世印造されたのが、我が国においては立正大学図書館や快友寺に所蔵されている『古尊宿語録』なのである。

このように「洪武南蔵」、そして「永楽南蔵」へと継承された浄戒重校本『古尊宿語録』は、至極意図的な性格を保持した編纂物であった。それはその巻第二十一が端的にそれを物語っている。すなわちその巻第二十一には、白雲守端より編纂者浄戒の師覚源慧曇に至る楊岐派・大慧派の禅僧の語録が一括収録されていた。つまり浄戒は、自らが編纂した『古尊宿語録』中の一巻に自身の属する派の禅師の語録を収録することで、禅宗界における自派の位置付けを明確にすることを狙ったものと考えられる。しかしながらその中には、従来でもまったく知られていない、すなわち斯界未知の禅僧の語録が存在しており、これらは南宋から元、明初に至る間の同派の歴史を知る上で貴重な史料とな

ろう。

そのような性格をもつ南藏本を嘉興藏本と比較してみると、そこに大きな相違が見られる。確かに構成上嘉興藏本は、基本的に南藏本を継承しているが、そこに収録されている語録の内容には大きな開きがあった。南藏本は、はじめ「洪武南藏」の「統藏」として重校されたが、他に多くの禅籍も入藏せねばならないといったスペース上の制約から、浄戒は原典よりその主要部分を抜き出してまとめざるを得なかったのであろう。ところが嘉興藏本編纂者は、おそらくその巻第二十一の存在も手伝って、そのような浄戒本『古尊宿語録』を私意的な、一宗派に偏った編纂物として捉え、その巻第二十一所収の禅師の語録をことごとく削除する一方で、各禅師の語録を本来の姿（宋・元版）に復元すべく、大幅な加増を試みたものと思われる。嘉興藏本が南藏本に比して多くの序や行状、祭文などが付加されているのは、よくそのことを物語っている。

以上のことから、従来考えられているように、南藏本が嘉興藏本にそのまま継承されていたのではないことがわかり、嘉興藏本は南藏本の構成をベースとしながらも、その内容は入藏時に再度編集の手が加えられたものであったのである。こうした複雑な経緯が生じたのは、南藏本がまったく浄戒の意図によって編纂されたものであったからにほかならない。

南藏本によって以上の事実が明らかにされたのであるが、南藏本は、宋版から明版への『古尊宿語録』の変遷過程を研究する上で極めて重要な存在といえるが、今後、宋元版、南藏本、嘉興藏本の三者間での各禅師の語録の比較検討がなされなければならないであろう。また、以上の考察をとおして感ずるのは、浄戒と南藏、さらには浄戒と彼が重校した南藏初入藏禅籍との関係の深さである。なに故浄戒は、当時の禅宗界を代表して南藏の編纂に参加し、諸禅籍を重校したのであろうか。南藏の成立過程を考える上でもこのことは重要な点といえよう。また浄戒が重校した『明覚禅師語録』や『圓悟佛果禅師語録』『禅宗頌古聯珠通集』などが立正大学図書館及び快友寺に少なからず存し

ている。<sup>(30)</sup> これらも宋元版や嘉興蔵本との比較検討を行なえば、あるいは思いがけない事実が明らかになるかもしれない。以上の諸点については別稿に期することにした。

## 註

- (1) この校勘記は柳田聖山氏主編『無着校写古尊宿語要』(禪学叢書之一、中文出版社、一九八四)に収録されている。
- (2) 「古尊宿語録について」(『第二禅宗史研究』、岩波書店一九四一)。宇井氏は『古尊宿語録』が「北蔵」に入蔵されたと誤たれている。『古尊宿語録』は北蔵には入蔵されていない。前掲註(1)の道忠も、その「校訛」で明版の『古尊宿語録』の典拠を「北蔵」と誤解している。
- (3) 「古尊宿語録考」(『花園大学研究紀要』二、一九七一)。
- (4) 「古尊宿語録」正統諸本の系統」(『曹洞宗研究員研究生紀要』十三、一九八一)一五六〜七頁。
- (5) 快友寺所蔵の南蔵の現在までに至る調査状況や、印造時期、当初の購入者、さらにそれが快友寺に納入された時期などについては、拙稿「山口県快友寺所蔵の明代南蔵について―江戸時代に輸入された大蔵経―」(『第二届中国域外漢籍国際学術会議論文集』、一九八九)を参照されたい。
- (6) 立正大学図書館所蔵の南蔵の所蔵目録には、立正大学図書館編『立正大学図書館所蔵明代南蔵目録』(同大図書館、一九八九)がある。なお解説は野沢が担当した。
- (7) 同寺南蔵中の禪籍の調査は、一九八八年三月と七月の二回に亘って行なった。
- (8) 立正大学図書館所蔵の『古尊宿語録』は、前掲註(6)の目録の別冊として、同大図書館より『立正大学図書館所蔵明代南蔵本古尊宿語録』(同大図書館編)と題し、一九八九年二月に刊行された。また快友寺所蔵の『古尊宿語録』は、『山口県快友寺所蔵明代南蔵本古尊宿語録』(野沢佳美編)と題して、同年六月に宗教典籍研究会より刊行された。なお両影印本とも、解説は野沢が執筆した。
- (9) 拙稿「明代南蔵考―立正大学図書館及び山口県快友寺所蔵本を通して―」(『立正史学』六十、一九八六)、及び前掲註(6)同目録の解説で、南蔵の書誌的事項について触れた。
- (10) 柳田聖山氏主編『六祖壇経諸本集成』(禪学叢書之七、中文出版社、一九七六)に快友寺所蔵の同経典が影印されている。
- (11) 前掲註(3)同氏論文十〜十六頁。
- (12) 「鼓山・怡山蔵逸佛書録」(『東方学報』東京第六冊、

一九三六。

(13) 前掲註(3) 同氏論文七、八頁。

(14) ただし彼らの法語の一部は、明初の文秀編『増集統伝燈録』(統蔵二乙一十五―四〇五)にも引用されている。

『増集統伝燈録』には永楽十五年の文秀の序がある。南蔵本『古尊宿語録』は後述のように永楽十二・三年には上梓されていたようであるから、おそらく文秀は、彼らの語録を編集するに当たって南蔵本をその拠所にしていたもの推測される。

(15) 前掲註(3) 柳田氏論文及び椎名宏雄氏「明代大蔵經と宋元版禅籍」(『宗学研究』二十七、一九八五)参照。

(16) 著者が快友寺を調査した折、これらの經典の卷首に南蔵本と同様に「僧録司右闡教兼鍾山靈谷禅寺住持淨戒重校」の一文があるのを確認している。また智旭撰「闡蔵知津」卷四十二にも、これらの經典が淨戒の重校本であることを明記している。

(17) この他淨戒に関する略伝には「統燈存稿」(統蔵二乙一十八―一)、『五燈嚴燈』(統蔵二乙一三三―一五五)、『金陵梵刹志』卷三・鍾山靈谷寺・人物などがあるが、いずれも簡略である。

(18) 明初の仏教については、野上俊静氏「明初の僧道(僧門)」(『大谷学報』二十七―一、一九四八)、龍池清氏「明初の寺院」(『支那仏教史学』二―四、一九三八)、志賀高義氏「明初の法会と仏教政策」(『大谷大学研究年報』二十一、

一九六九)、間野潜龍氏「明代の仏教と明朝」(『明代文化史研究』、同朋舎、一九七九、所収)、など参照。

(19) 前掲の同治『湖州府志』では「靈谷寺」となっているが、その上に天竺寺、虎跑寺とあり、両寺はいずれも杭州の名刹であることから、靈谷寺は杭州の靈隱寺の誤りであると思われる。

(20) 『宋学士文集』(四部叢刊本)卷八所収。

(21) 『金陵梵刹志』卷二、欽録集、洪武二十七年甲戌の条。

(22) 「関于仏教大蔵經的一些資料」(『世界宗教資料』一九八一―一四)。

(23) 張氏によれば、この南蔵は現在四川省図書館に収蔵されているとのことである(前掲註(22) 同論文)。

(24) 「洪武南蔵」「永楽南蔵」なる名称はまったくの張氏の創造ではなく、呂氏の「南蔵初刻考」からの引用である。ただ呂氏は、張氏がいう「洪武南蔵」を「初刻南蔵」と呼んでいる。本稿では一応張氏による「洪武南蔵」「永楽南蔵」の名称を使用することにしたい。

(25) この点については疑問がある。筆者が行なった立正大学図書館所蔵の南蔵(永楽南蔵)の刻工者名調査によれば、同蔵内には、元末から明初の江南で活動していた刻工者が二十七名確認された(前掲註(6) 同目録の解説七八―九頁)。つまり、「永楽南蔵」は「洪武南蔵」の板木が火災に遭ってことごとく烏有に帰したとする意見には同意できない。しかし、のちに述べるように、いつ、どのような事

情によって「洪武南蔵」から「永楽南蔵」へと変遷していったのかは、いまのところ不明である。

- (26) 『歐陽大師遺集』（新文豊出版公司、台北、一九七六）第二卷、一四七―一四八頁所収。この報告書の所在についてはなかく不明であり、ただ前掲註(22) 同論文で張氏がその概略を述べていただけであった。なお張徳鈞氏「關於清刻大蔵与歴代蔵經」（張徳鈞氏著『仏教聖典与釈氏外学著録考』、大乘文化出版社、台北、一九七九）によれば、釈徳潜「檢閲崇慶古寺明蔵記」（内院雜刊・入蜀之作四）なるものがあるというが、未見。

- (27) 本稿で取り上げている南蔵本の「卷第一之一」の函号函次が「密二」であり、「密一」には『六祖壇經』が収録されていたことはすでに見てきたが、このあとに引用する呂氏の報告書に掲載された書影によっても知られるように、「統蔵」本の「卷第一之一」の函号函次も「密二」となっている。ただ呂氏の報告書には、「密一」に収録されている經典については何等記載がなく、どのような經典が収録されていたかは不明である。

- (28) 前掲註(3) 同氏論文八〇九頁。

- (29) 南蔵のあと、北京でいわゆる北蔵が開板されるが、北蔵には『古尊宿語録』は入蔵されていない。あるいは北蔵編纂者は、嘉興蔵編纂者と同様に淨戒本を評価し、『古尊宿語録』を入蔵しないという厳しい措置を執ったのかも知れない。

- (30) 立正大学図書館には『禪宗頌古聯珠通集』巻第七が、また快友寺には筆者の調査によれば『圓悟佛果禪師語録』巻第一、第二、第六、第七、『明覚禪師語録』巻第一、第六、『禪宗頌古聯珠通集』巻第十五、第十八が現存している。なお、同じく淨戒の重校本である『六祖壇經』は、前掲註(10) 同書に柳田聖山氏の解説があり、同經典の南蔵本を含めた各テキストの比較がなされている。

#### 〔追記〕

本稿脱稿後、駒沢大学の椎名宏雄先生より、『永楽大典』巻一一九〇四に「百丈広録」が収録されていることをご示教いただいた。そこでさっそく世界書局本『永楽大典』を調べたところ、そのほか八箇所にも南蔵本『古尊宿語録』の一部が引用されていることが判明した。『永楽大典』は、南蔵より以前の永楽六（一四〇八）年に完成している。南蔵本は本稿で述べたように、永楽十一（一四一三）年二月より開板されているから、それ以前にその定本が『永楽大典』に採用されていたことになり、極めて注目すべきことといえる。南蔵と『永楽大典』との関係については、別に稿を改めて論じてみることにしたい。重要な事項を注意された椎名宏雄先生に對し、心よりお礼申し上げる次第である。